漢代の家畜（上）

宮川尚志

一

家畜の馴養は有用植物の栽培と共に人類の文明發達の重要な契機で、新石器時代において既に現在の文明の源流をなす動植物の利用が開始されてをり、現代の家畜の主要な種類は有史以前に於て出揃つてゐたと言はれる。①

東亞上代に於ても家畜の馴養は極めて早期から行はれ、甲骨文の知識に據れば古文獻に六畜として代表的な家畜に數へられる馬・牛・羊・豕・犬・鷄の六種は殷代に盛んに使役利用されてゐたことが判り、②更に古くは河南省仰韶村の遺跡には後來漢族に親しい關係を有する樣になつた豚の飼養の痕跡が見られる。③

人類が自然から生活資材を獲得する仕方は地形・風土の差異により限定され、或は主として動物から食衣住生活の供給を仰ぎ、或はこれを植物に俟つ。人類の經濟生活の原始時代には採集・狩獵・漁撈・手鋤農業が何れの地方においても一般に行はれたが、稍進歩した段階に至つては遊牧及び農耕が生産業となつた。遊牧生活が農耕定住の生活より低度なもので、必ず常に後者に先立つものであるといふ發展段階說は風土の相違を強調する實證的な立場から批判さるべき弱點を有する。④漢族の古代史に於て牧畜主業の時代が農耕生活に先行したであらうかといふ問題も、⑤先づ漢族と呼ばれる民族そのものの成立が中國各地域に亘り夫々特有のフロラとファウナに取り圍まれて、適應した生産方法を選擇してゐた諸種族の混合同化の結果であるといふ事實の指摘により、一應提出の仕方を改められねばならぬ。陝西・四川の山岳地帶には鬱蒼たる原生林が存在し狩獵や採木の場所になつたであらうし、⑥燕齊の

海岸地方の住民は當然漁撈を營んだであらう。[7] 山東半島の原住民は狩獵牧畜を事としたこと禹貢に見る所である。ただ注意に値ひするのは後代の漢族の生活の方向がひたすら農耕中心主義に進んで行つたことであり、森林は伐採しつくされ、桑田や燒畑に化せられ、放牧地 Pasture や刈草地 Meadow は人間の食糧を直接供給する畑地に變更され、久しく低度の技術を守つた漁撈業も內陸民族たる漢族全般にとり當然重要性を獲る能はず、結局灌漑を必須とする集約的主穀農業が國富の絕對的に主要な源泉となるに至つたことである。[8]

この事實は所謂塞外史の扱ふ乾燥アジアの蒙古系トルコ系諸民族の古來變化なき牧畜生活と、西洋諸國における有畜農業生活とに比較して、日本や朝鮮・佛印・シヤム等を含めた濕潤アジアの經濟生活の特徵として銘記されねばならぬ。[9] 衆知の如く現代中國は農村人口過剩による土地の狹少が耕地の零細分割を著しくし、勞働力の低廉は畜力の利用をむしろ經營上の負擔と感ぜしめ、これらの原因が科學教育の不振とあひまち農業の技術的改善の希望を空しくしてをり、農業を國家繁榮の基礎とする傳統的な思想にも拘らず、農業生產力は政治的、及び政治的原因に大半歸せられ得る自然的原因、即ち收取と飢饉とにより阻害され、食糧生產においてすら自給をとかく困難ならしめてゐる現狀である。家畜の飼料を生產すべき土地は擧げて人間の食糧不足を緩和すべく利用され、歐米農家の所有地利用において畑地と殆んど率を同じくする牧草地はここにおいては尺寸の餘地なく僅かに養はれる役畜や家計的小家畜の飼育管理も無方針のままに委ねられ、貧農小農層においては專ら人力による無畜農耕の實情にある。中國の氣候は家畜特に馬の如き大家畜の飼育に適當でなく、水田耕作の普及は灌漑による土地の養分の補給を便とし厩肥の必要度を減じてゐる等の事情とあひまち、牧畜は西北の陝西甘肅や西南の雲南・廣西の諸省を除いては中國本部の農業においては重要な地位を占めるとは言はれない。[10]

これを農民の營養の面から考へても動物質食品の補給は一割に充たぬとされ、豚・鷄の肉や卵が食に供せられるのも一年數回の特別な祝祭の時季に限られ、酪農は古來絕えて行はれず、牛肉禁忌は儒佛道三教の共

に說敎する所であつた。[11] もとより上流支配者層の食膳は鳥獸魚肉に充ちてゐたことは、肉食の家とは上流富者を指す語であり、粱肉に飽くことが彼等の奢侈であつたことから考へられる。[12] しかし國民の大多數が前述の如き「植物的」な生活をしてゐたことは、[13] 歐洲國民が營養を動植物雙方から適當に攝取し、即ち土地の生ずる植物質の一部を用畜を通して動物質に變化して食用に供し、役畜により作物の收穫を增大せしめるといふ循環的工作を營んでゐるのとは著しい對照をなしてをり、又日本其他海岸民族の利點である魚介類による動物質補給の方途の存することとも稍〻異つてゐる。[14]

牧畜の奬勵は現代中國の農業政策においても强調せられをり、特に小麥作を主とする華北では技術的にも家畜使用は必要であると認められてゐる。[15] しかも現狀はかくの如くでありその改善も容易ではない。けだしその因つて來る所遠く、關聯を持つ社會的諸因子は複雜かつ惰性的である。本稿は家畜が中國農業において示した役割の歷史的變遷を明かにすべく起稿したが、一應わづかに漢代を中心とする上古の時期を限つて、しかも極大略の狀況を敍述するに止めたものである。

二

廣義において家畜とは馴養動物の全てを指し、從つて愛玩用の鳥類や昆蟲、水產養殖の魚類や甲殼類、絹布の供給者として、中國史上特別な重要性を發揮した蠶、等も包含されるが、狹義においては農用家畜、即ち動物質生產物及び動物體自身を人間の食料衣料等の用途に供し（用畜）又は耕作・乘輓のため畜力を提供する（役畜）、所謂農家の有生器具に限られる。[1] しかし漢代の家畜と題して考究の對象を定める時、漢族古代の傳統に從ひ前述の六畜及びその必須の代用となつた動物に限定したい。從來各方面（土地制度や租稅體系や治水灌漑工作・勞働・技術）から企てられた中國農業史の側面を家畜飼育の關聯において眺めたいのが最初の方針でもあつたが、「祀と戎とは國の大事なり」との古語ある如く、祭祀の犧牲としての牛羊豕、軍用・儀仗用としての馬の飼育に關する敍述を全く省くことは六畜を對象とした以上許容されない。[2] 特に馬は元來定住農耕では關係のない動物で、こゝに關する限り野生原種の發祥地は中央アジア高原であり、アツシリア、

ヒッタイト・ヒクソス・カッシイト等印歐或はウラルアルタイ諸民族により太古以來馴養され、此等勇敢なる騎馬民族はバビロン・エヂプトの如き農耕文明民族を征服し、同樣の事情は東方においてはマッサゲートから馬を輸入した匈奴族と漢代乃至それ以前の漢族との間でも見られる。③民族學者ウイルヘルム・シュミットの說によると、人類文明の發祥したのは農耕の利ある大河川流域の平野であるが、その周邊の山岳沙漠地帶の遊牧民が屢々この平野に侵入し、兩民族の接觸の結果、文明の飛躍的發達が遂げられたといふが、④古代において殷周革命がこの著しい例證であると思ふ。要之中原に據る民族にとつて馬は外來のもので外寇により馬の使用を知り始めたので、現在でも風土の關係もあり馬の蕃殖飼育は主として滿蒙において行はれ、本部には成長した馬が輸入される。歷史上有名な漢族と北狄との馬貿易はこれを證する。ワグナーによると、華北の農家は馬よりも寧ろ騾（牝馬と牡驢の仔）を乘輓駄用とし、南部では都市軍隊の外では馬は見られないといふ。馬は征服者たる封建貴族の象徵であるとの通說は中國にも適應する。後漢の將軍馬援は「馬は戰時には甲兵の本であり、平時には尊卑の序を別つものである」と言ひ、⑤五代の李珪は「漢代に戶口千二百萬、墾田八百萬頃あつたのが、三國以後、農夫は軍衆より少くなり、戰馬は耕牛より多くなり、軍に供して農糧を奪ひ、馬に秣して牛草を侵し、戶口二百四十萬に減じた」と述べた。⑥馬と反對に牛は平和的農耕民の家畜であり用途最も廣く起源最古の大家畜と言はれ、財産評價の基準となり交換媒介物とされる一方、神聖視されて禮拜の對象ともなり、經濟・宗教の兩面に意義深い役割を演じた。牛と馬の重要度の消長は其の時代の平和的と軍國的との目標になり、東洋史では隨つて漢族と北方民族との對立關係の動向を指示する。洵に老子の「天下道有るときは走馬を却けて以て糞（たづく）る。天下道無きときは戎馬郊に生ず」といふ如く、前漢と後漢との時代性を比べて見てもこの傾向が興趣深く感ぜられる。

馬牛を大家畜として兩者の意義役割が右の通りとすると、中家畜たる羊豕を竝べると、恰も放牧に適して蒙古民族の第一の財産と都會地附近で舍飼され漢族の無二の伴侶との對比を示す。小家畜たる犬雞は村落生

活の景物であり、雞は晨を司り、狗は盜に吠え農村の自治確保の功勞者とも稱すべきである。六畜の馴養發生地を考究すると馬羊犬は北方又は北西方に牛豕雞はむしろそれより南方に歸せられる。[8] 五穀と連稱され王者の居る所には無しに濟まされぬものとされた。[9] 此等の家畜の發生地を臆測しても、漢文明が悠久な古代から北方及び南方からする原始文化の波を受けた有樣が朧氣ながら窺はれるわけである。

三

前漢代では牧畜は農業と並んでかなり重要な產業部門を占めてゐたと見られる。漢書地理志に涼州の水草の美畜牧の豐を記してをり、山西省も左傳に名高き屈產の乘の產地であり、[1] 馬邑の附近は武帝の時でも畜野に布く有樣で匈奴がその掠奪のため侵入し初陣の李廣に名を成さしめたことがある。[2] 前漢初年には秦末の內亂のため軍馬が消耗し天子でも同じ毛色の馬四頭を車に揃へることができず、將相でも一匹百金もする馬を獲られず牛車に乘つてゐたといふが、[3] 文景二帝の豐富の後を受け雲中雁門上郡遼東の邊塞地方では畜產が漸次好況を呈してきた。[4] 史記貨殖傳に牧畜による貨殖の有利を說き特に皮裘の商品價値を重視してをり、鹽鐵の利により致富した者と並んで牧畜により素封家となつた烏氏倮や橋姚の事を述べてゐる。巴蜀の山地はまた別の畜產地帶であり、筰馬旄牛が名產である。筰馬は晉の代滇馬、後世の川馬であり、蒙古の草原馬とは別種の東洋馬 Equus Orientalis であり、諸葛亮の南征により獲たのは此の種の小馬であつた。[5]

民間でも牧畜が有利とされたから官牧も固り大規模に行はれた。右扶風は畜牧の中心地で掌畜令丞の官が置かれ、豪强の有罪者はここの奴隸にされ秣を刈らされた。上林苑では水衡都尉の管轄下で、祭祀や巡幸の場合に用ひる天下百官の乘用駕用の馬六萬頭が飼育され、長安にある未央・大廐・路軨・騎馬・騊駼・丞華の六廐に配屬補充されてゐた。其他河西六郡の界中には牧師苑令の掌る諸苑三十六所が設けられ、丞・郎の屬官の下で奴婢三萬人が主として軍用に供する苑馬三十萬頭を飼育してゐた。祀戎二事以外の帝室の私用の馬は天子の爲に家馬（挏馬）あり都廐で飼はれてゐたし、皇后の車馬は中廐に飼はれ中太僕が管理し、太子

には厨廐が設けられた。以上の諸官は九卿の一たる太僕に統屬されてゐる。馬の官牧がこんなに盛大であつたのは武帝一代のことであり、⑥元帝の代になると儒教的文治主義政治家の貢禹は「景帝の時には廐馬百餘匹に過ぎなかつたのに今では萬餘匹に增加してゐるが、これは數十匹でよい。長安城南苑地以外の三輔の苑を全廢し貧民に振給し、⑦馬の穀食を停め費用を節せよ」等と上奏してゐる。

軍用馬は先づ京師駐屯の羽林騎始め、屯騎・越騎・長水・胡騎の各校尉の部下の騎兵隊に配備され、乘用・駕用の馬は牽車都尉・駙馬都尉の管轄に廻された。⑧西京雜記には武帝の頃の馬匹に關した珍らしい物語を集めてゐる。

馬は漢族にとつては最も得難く貴重すべき家畜であり、匈奴族等とちがつて犧牲に捧げることは古來少かつた樣である。前漢初西時の白帝の郊祭に用ひる三牲の一には赤色黑鬣尾の駒があり、雍の五畤にも駒を用ひたが、武帝の太初元年、天子の親祠に非るときは木寓馬を以て生駒に代へ、それ以外の山川の祀には一切駒を用ふるを禁じた。⑨動物犧牲は聖なる食用であるが、馬肉の食用も決して一般的でなかつた。馬を殺し肉を食ふのは戰爭中の非常の必要に促がされた場合に限られたといつても大過ないと思ふ。⑩これらは要之馬が漢族本來の家畜でない事を物語つてゐる。前述の胴馬の乳を採り馬乳酒を釀し太常樂人に賜つたことがあり、如淳の時代に梁州でも飲用されてゐたといふが、これは蒙古人の愛用するクミシュが一部漢人に賞味されてゐたことを知る挿話に過ぎない。⑪馬は官物であり民間では中々獲難く、軍人でも貧しい間は購入できず、馬が有ることが富の表示であつたことを告げる逸話は六朝の頃にかけて多い。⑫しかし陝西・山西・河北の邊境地帶が猶開墾されず人口も稀薄であり、かつ北狄との武力的衝突が避けられてゐた時代では民間でも馬が飼養されてゐた。鹽鐵論未通篇には「文景の時には牛馬群を成し農夫は馬を以て耕載し、民騎乘せざる者なかつた」と見え、同書散不足篇には「馬が庶人の勞に代るべく、行けば則ち柂に服し止まれば則ち犁に就く」とあり、馬が乘用・輓用の外に犁耕にも使役されたことを知る。しかし馬の飼育は技術的に困難であり飼料の調辨も容易でなかつたことは同篇に「それ一馬

櫪に伏せば中家六口の食に當り、丁男一人の事を亡ふ」とあり、武帝の外征に續く國内の窮乏から民間の馬の飼育は漸次少くなり、三國時代以後は牛の所有さへも富農の表示となり、馬よりも廉價で手間の掛らぬ驢が農用家畜として便利に思はれてきた。⑬これは牧畜業の衰退を示すわけであるがその主因は人口增加による牧草地の狹少化である。戰國策や史記を讀むと蘇張遊說の士は諸國王に向ひ、その自國の兵士車騎貯穀の量を擧げ煽動したり敵國のそれらを告げて心配させたりしてゐるが、⑭魏王に蘇秦が說いて「大王の地は方千里にして廬田廡舍あるも曾ち芻牧牛田の地なし」と警告してをり、戰國時代に既に中國の中央部を占めた國では農業の利益が牧畜のそれと競合し後者を後退させ、かつかかる國は馬の供給を仰ぐべき邊境からも遠かつたから當時の戰爭技術で最も賴みとなる騎兵の整備に苦しんだことが判る。漢書溝洫志に見える河東の守番係の奏によると、黃河流域の汾陰・蒲坂は武帝の時でもまだ農耕が行はれず、河兩の棄地として民その中に茨牧(草刈と放牧)してゐたが、彼は灌漑を行ふことにより穀二百萬石を增產し、山東漕運の勞を省かんと請ひ許可された。貢禹の上奏にもあつた如く、官有の苑囿を廢し農民の招墾を許すことは重農主義政治家の獻策で屢々行はれ、平帝元始二年には安定の呼池苑は安民縣となり貧民をここに移住させ犁牛種食を與へた。⑮王莽の時になると土地の饒と水泉の利で知られるかつての放牧地太原・上黨でも屯田が行はれる樣になつた。⑯牧畜生活の農耕への改變は異民族に對しても行はれた。宣帝の時西羌を平定した老將趙充國は湟中の灌漑施設を整へ、農利を興し、駐屯漢軍には費用のかさむ騎兵をやめて步兵萬人を殘し、各人三十畝を耕させ、かつ羌族の農地に芻牧することを禁じた。彼は軍馬一月の食は田士一歲を度支すべしと計算した。⑰

牧畜特に馬の飼育が穀作により次第に壓迫され、穀作が犂牛及び鐵製農具の普及と灌漑施設の擴充により發達してくることは、前漢から後漢へ移りゆく時代相の重要な變貌である。經濟的事情の變化が敏感に時代の氣風に反映してゐる。先づ後漢の馬政機關を檢すると、太僕卿官屬は前漢に比し著しく淋しくなり、少府に屬してゐた考工令(兵器製造)と車府令(乘輿諸車)・未央廐令の三に過ぎず、⑱陝西甘肅地方が羌族侵寇の場

となつたことは諸處に散在した苑を荒廢させ、ただ羽林郎の監領する漢陽の流馬苑、安帝の置いた益州南部の三苑、靈帝が恐らく國内騷擾の兆に備へて復興を計るために洛陽郊外に置いた苑數所が擧げられるにすぎない。[19] 馬匹の使用について軍國的色彩よりも貴族的儀式的な感じが續漢書輿服志などを通して窺はれる。車馬の制度の變遷を見ると周代男子は專ら立乘してゐたが、漢代には立車の外に坐乘の安車が造られ、始めは婦人の爲や老人の優遇に用ひられたのが、後漢末以後、一般化し、車體も大きくなり戸が設けられ、裝飾が華美になり帷が施した衣車(輜軿)が現はれ、魏晉以後、馬が少くなつたので牛・犢を用ひることが多くなつた。[20] 東晉では馬政事務は門下省に移され、宋以後では太僕は郊祀の時臨時に設けられるのみとなつた。[21] 晉書輿駕志によると靈獻以後天子より士に至る迄牛車を常乘とし、古代の軍用馬車たりし軺車も牛がひく樣になり、要之南朝では乘馬の風習そのものが廢れた。さればこそ魏の太武帝は宋を無足の國と侮り、南朝は北族騎兵隊を防ぐのに長江水師にたよる外なかつた譯である。

牛と共に驢が馬の代用になつてきた。史記匈奴傳には匈奴の奇畜として橐佗(らくだ)・驢・贏(騾)を數へてゐるが、まもなく漢人は驢の使役を知り、武帝の時以來軍糧運搬に用ひ後漢は羌族から多數の驢を分捕り盛んに用ひた。[22] 後漢末馬は戰鬪用で手一杯となり、乘駕用には馴れ易い驢が漸く文弱化した宮廷人や都人士に愛用される樣になつた。靈帝が列肆を後宮に作り四白驢に駕し遊行し、それが公卿以下洛陽人士の流行となつたことは續漢書五行志の作者をして顰蹙せしめ「驢は重きを服し遠きに致り、山谷を上下し野人の用ふる所なるに、かかる流行が生じたのはけだし執政の者皆驢の如く遲鈍であるからだらう」と言はせた。世界各國と同樣漢人にとつても驢馬は間の拔けた愛嬌者として輕んぜられ乍らも愛用され、南朝貴族の隱し藝に驢鳴をなすことあり、家貧しき處士は驢を驅りて田夫に伍し、種々な逸話や寸景を正史の無味乾燥の記載の中に點在させてゐる。[23]

註

一

① 家畜に關する一般的知識は、加茂儀一氏「家畜文化史」、同氏譯コンラッド・ケルレル「家畜系統史」宮坂梧郎氏

「畜産經濟地理」高岡好廉氏「農學綱要」等を參照した。

② 殷代の牧畜については、小島祐馬博士「殷代の産業に就いて」(支那學三ノ一〇・大一〇)田中齊氏譯・馬乘風氏「支那經濟史」森谷克己氏「東洋小文化史」岡崎文夫博士「支那古代史要」郭沫若氏(藤枝丈夫氏譯)「古代支那社會研究」

③ 松崎壽和氏譯・アンダーソン「黄土地帶」

④ 藤澤保太郎氏譯・ハインリッヒ・クノー「世界經濟史大系」には採集(生食)—狩獵—遊牧—農耕の圖式を誤りとなし、狩獵から直ちに灌漑農耕に入つたカリフォルニアのインヂアン、飼育動物と草原なく遊牧生活のあり得なかつた南洋土人、兩者があつても遊牧の必要がなかつたアメリカの土人を說き、狩獵民が土地耕作を經ずに遊牧に移つた所はなく、遊牧民の多くは牧畜の外に多少とも牛を鋤につける耕耘を營んでゐること等を注意してゐる。

⑤ 陳登原氏「中國文化史」

⑥ 杉本壽氏「支那森林經濟論」(東亞問題四ノ五・昭一七)ソープ「支那土壤地理學」に笠可楨氏の說を引く。

⑦ 李士豪・屈若搏氏「中國漁業史」

⑧ 横川次郎氏編譯・ウイットフォーゲル「支那經濟史研究」平野義太郎氏監譯・同「解體過程にある支那の經濟と社會」陳嘯江氏「西漢社會經濟研究」秋澤修二氏「支那社會構成」

⑨ 松田壽男氏「乾燥アジア文化史論」同氏「漠北と南海」ウイットフォーゲル「東洋的社會の理論」

⑩ 岡崎三郎氏譯・バクストン「支那」佐藤國一郎氏譯・リヒヤルト・キルヘルム「支那の經濟心理」

⑪ 三輪孝・加藤健氏譯・ロッシング・バック「支那の農業」によると農民の攝る食料別カロリーは穀物八三・一、豆類六・七、藷類三・九、畜産物二・三、植物油二・〇、野菜一・三、砂糖〇・五、果實〇・二である。山名正孝氏「支那に於ける食糧問題」農民の衣食住(滿洲國産業部資料)によると豚は年に一頭居るのがせい〳〵であると。

⑫ 秋田成明氏譯・尙秉和氏「支那歷代風俗事物考」

⑬ Pierre Gourou L'utilisation du Sol en Indochine Française P139 以下にアジア民衆の生活の資源が殆んど植物から供給されることを屢々强調し、又 La faible importance de l'elevage の項あり。

⑭ 「日本國勢圖會」二八畜産業。

⑮ 滿鐵調査部「北支那の農業と經濟」第四篇北支那の畜産經濟。

二

① 芝田清吾氏「畜産學原論」永友繁雄氏譯・エレーボー「農業經營經濟學」滿鐵刊行會譯・ウィルヘルム・ワグナー「中國農書」下卷には廣義の家畜につき詳細な說明を加へてゐる。

② 六畜は漢書二八上地理志の顏師古の註によると六擾(擾は人の馴養する所となるの意)とも云ひ、雞を除き五擾、更に犬を除き四擾といふ。又芻(牛羊)豢(犬豕)

の語あり。因みに陳嘯江氏「西漢社會經濟研究」によると、家畜の價格は馬十五萬から二十萬、牛四萬五千、羊千五百から三萬、豚三萬（一頭の肉は一萬）である。

③ 板倉勝正氏譯・ドラポルト「東方古代世界史」[illegible]儀一氏「家畜文化史」家馬の項。

④ 大野俊一氏譯・ウイルヘルム・シュミット「民族學の歴史と方法」

⑤ 後漢書五四・馬援傳

⑥ 五代會要二五

⑦ 蜀の楊顒が諸葛亮を諫めた言の中にある。（蜀志一五）外に犬は獵に用ひられ良狗は貧家では買へなかつた程の價格を有した。（呂氏春秋二四貴富）又古代では猫が知られてゐなかつたので鼠を取るために家で飼はれ齊に相狗を善くする者がゐた。（同二六士容論）

⑧ 馬の舊大陸における祖先はプルジェワルスキー馬で中央アジア高原に今猶野生のまま殘つてをり、東亞の馬の故郷が中亞であることは確かである。羊はセム族の文化地域に非常に古くから見られる。犬は多元發生説がありシベリアともインド・マライとも考へられるが、文獻の援助を借りると淮南子墜形訓に北方の地は菽に宜しく犬馬多し」とあり、後漢書七八應劭註に鮮卑では犬羊群を爲すといひ、古代中國の犬は北方系統なること略明かである。牛も舊大陸の各地で古くから家畜になつてゐたが、アジア南部が最古の馴致發生地と考へられ、豚はアジア東南部に求められる。雞は孔雀や雉と同じくアジア南部の原産であり、インドで家畜化され中國に到來した。漢書郊祀志に越巫粤祝が雞卜を用ひるといふのは現在海南島の黎族の風習と通じてゐる。

⑨ 岡崎文夫博士「魏晉南北朝通史」五六四頁　呂氏春秋孝行覽に「熟五穀、烹六畜和煎調、養國之道也」

三

① 春秋僖公二年の屈産の名馬について左傳、穀梁は屈邑の産と解するが、公羊傳は屈産二字を地名となし春秋彙纂は山西の石樓縣東南の屈産泉と關係づける。この條は晉の荀息が屈産之乘と垂棘之璧を以て道を虞にかりて虢を伐たんとしたことを記してゐる。（史記三九・晉世家）

② 前漢書一〇武帝紀元光二年。冀の北土は馬の生ずる所（左傳）の古諺あり、代は馬郡と呼ばれた。（呂氏春秋、長攻）

③ 史記平準書

④ 漢書食貨志

⑤ ワグナー「中國農書」下卷　井坂錦江氏「東亞物産史」

⑥ 前漢書一九上・百官公卿表。食貨志。一二二・減宣傳。七六・尹翁歸傳。

⑦ 前漢書七二・貢禹傳

⑧ 前漢書一九上・百官公卿表

⑨ 前漢書郊祀志下・史記封禪書

⑩ 馬肉を食した例は秦の穆公の善馬を部下の野人が岐下の戰の時盜食し、公は馬肉を食へば酒を飲まぬと體に障

るからとて酒を賜ひ德を施した話（史記秦本紀）楚の莊王の愛馬が死んだ時、優孟が大夫の禮を以て馬を葬らんとする王を諫め結局大官に下げ渡し肉を食したこと（史記一二六）があるが共に非常の例である。陳湯は郅支の馬牛羊を軍食に供し（漢書七〇）瓜步で圍まれた北齊の將士は馬肉を食つた（陳書一）のを見ると軍隊では戰時の非常食として馬肉を用ふるのはむしろ一般的であつた。

⑪ 漢書百官公卿表

⑫ 後漢書五五卓茂傳に彼が府史たる時に馬を所有してゐたため盜んだのかと疑はれた。北齊の高歡は家貧しく武明皇后を聘してからやつと購入して隊主に立身したといふ山內一豐の樣な話がある。（北齊書一）後漢光武帝も蹶起の始めには牛に騎り新野の尉を殺しその馬を奪つたといふ。

⑬ 後述

⑭ 六國の騎兵の數は諸史料によると、魏五千、趙・楚・秦各一萬、燕六千である。

⑮ 漢書一二・平帝紀

⑯ 漢書五八・馮衍傳

⑰ 漢書六九・趙充國傳

⑱ 後漢書百官志

⑲ 陽嘉元年に西苑、延熹元年に鴻德苑、二年に顯陽苑、光和三年、洛陽宣平門外に東西畢圭苑、靈昆苑を作つた。牧馬のためのみでなく狩獵場として上林苑や平樂苑など洛陽附近にあつた。

⑳ 尙秉和氏「支那歷代風俗事物考」

㉑ 晉書職官志・宋書禮志

㉒ たとへば漢安三年、武威太守趙冲は羣盜羌の牛羊驢十八萬頭を獲た。建寧二年段熲は東羌を討ち牛馬驢騾氈裘廬帳什物無數を得た。（西羌傳）永和三年、日南象林徼外の區憐を討つ時に驢を使用した。（後漢書八八虞詡傳）

㉓ 晉書四二・王濟傳に彼が驢鳴を好くしたことあり。魏志二六引晉陽秋に、徐威が家貧しく車馬僕なく自ら驢を驅り單行したことあり。猶驢が製粉の石臼廻轉に役せられたことを語る盛弘之「荊州記」の興味あるが作爲的なる話がある。蜀將關羽が敗軍の餘、麥城を守るやその東西に石城と驢城の二地あり、住民曰く、「石と驢とに夾まれては麥はひとりでに破れるだらう」と。